

2019年の中国の新年:ぶた年

ゾーンガンとオシュキ

2019年の中国の新年を祝う物語

中国の十二支は、各年をそれぞれ特定の動物と結びつけた 12 年で一巡する周期に基づいています。その年自体とその年に生まれた人は、相当する動物の特質を表すと信じられています。

今年は、太陰暦によれば、中国の新年は2月5日火曜日となります。この日は 12 年の周期の 12 番目の年、ぶた(訳注:日本ではいのしし)年の始まりを示します。ぶた年生まれの人は、寛大で、気立て優しく、信頼でき、そして誠実だと言われています。

ずいぶん昔、北アメリカにある大きな湖の岸に、食べ物を探す2匹のブタがいました。2匹のブタは兄弟で、その時はまだ赤ん坊で、少しやせてはいましたが、信じられないくらいかわいらしいブタでした。

2匹のブタは、おなかがすいていたにもかかわらず、上機嫌ではしゃいでいました。泥の中で転げ回り、くしゃくしゃなピンクの鼻を互いに押し付け合い、それから周囲にある草むらを興味深く見ました。その中にはもちろん、むしゃむしゃ食べられる植物もあるはずです。

期待できそうな草が生えている場所を見つけたちょうどその時、どこか見えない所から不思議な音が聞こえてきました。ポトン、ポトン、ポトン。子ブタたちは一瞬止まると、周囲をのぞき見しました。何の音でしょうか。

ポトン、ポトン、ポトン。また聞こえてきました、あの音です。そしてそれは大きくなっていくようです。2匹のブタは小走りで草の陰に隠れて、できるだけ低く身をかがめました。目を大きく見開いて互いを見詰めました。

そして——音が消えました。

兄さんブタが慎重に一步前に進み出ました。草むらから少しだけ鼻を出したその時、突然——シュッ！大きな木のつえが彼の方に落ちてきたのです。彼は金切り声を上げて、弟の上にあおむけに倒れました。

2匹が大慌てで跳び起きると、大きなきらきらした目が彼らをのぞき込んでいました。おばあさんの顔がはっきりと見えてきました。年齢だけでなく優しさでしわが寄ったように見える顔でした。腕に下げていたのは、松葉でいっぱいブラックアッシュの編み籠でした。

「まあ、こんにちは！」と、おばあさんはつえを自分の方に引き寄せながら言いました。「あなたたちは誰かしら？ こんな小さな子たち二人きりなのかしら？」

子ブタたちは目をパチクリさせておばあさんを見ました。おばあさんは周囲を見回しましたが、母さんブタはいないようです。

「じゃあ、いらっしやい、籠の中にお入りなさい。おなかがすいているようね。この近くのショービータウンという村にある私の家に連れて行ってあげるわ。そして精いっぱい育ててあげましょう」

彼女の声は優しく心地良いものでした。子ブタたちは興味を引かれて彼女に近づきました。「いらっしやい」と、彼女はもう一度言い、子ブタたちの耳の後ろをなでてあげました。彼女は

子ブタたちをそっと押して、集めた松葉が柔らかく積まれた上に乗せました。そして、皆でショービータウンへと向かいました。

おばあさんは歩きながら手の中の籠を揺らしました。もう何年も、彼女は一人で暮らしてきました。孤独にはすっかり慣れてしまっていたが、心の底では悲しく感じていました。誰かとの交わりを強く求めています。2匹の子ブタに目をやると、心の中で何かが湧き上がり、長い間寒々しくなごりに感じていた彼女の存在の隅々に温かいものが広がっていくのを感じました。彼女が望んだのは、おいしくて温かい食事を子ブタたちに作ってあげること、ただそれだけでした。

自分の住んでいるウグワム(テント小屋)に到着すると、彼女はまさにそうしました。彼女はトウモロコシがゆを作ってあげました。子ブタたちが夢中でかゆをなめ尽くすのを見て、嬉しそうに鼻を鳴らす音が家中に満ちるのを聞いていました。子ブタたちが食べ終わると、わらで寝床を作り、彼らが眠る間、優しく歌ってあげました。

翌日の夜明け、おばあさんは外に座り、子ブタたちが彼女のウグワムの脇の野原を探索するのを眺めていました。太陽の柔らかい光が草を照らし、子ブタたちは暖かさの中に浸っていました。おばあさんはしばらく子ブタたちを見詰め、彼女の口元には小さな笑みが浮かんでいました。その時、彼女は気づきました。まだ子ブタたちに名前を付けていませんでした！

しばらくいろいろな名前を考えた末、彼女は決めました。子ブタたちはゾーンガンとオシュキとして知られることとなりました。

おばあさんの世話のおかげで、ブタたちはあっという間に大きくなりました。丈夫で健康になり、気質の優しさはそのままでした。特に、ゾーンガンにはどこか特別なところがあるようでした。

時々おばあさんは、彼は実は見た目よりももっと物事を理解しているのだという感覚を持ちました。

ある日、ゾーンガンとオシュキがおばあさんと暮らすようになって6カ月くらい経った時のこと、村で大きな祝祭がありました。おばあさんが参加するには少し騒がしいものでしたが、村の人々は立ち寄っておばあさんにあいさつをし、食べ物を分かち合いました。

ですから、午後になって3人の体の大きなたくましい男が玄関先に現れた時も、おばあさんはあまり気にしませんでした。

一人の男が前に出ました。「ノーコミス —— おばあさん —— ここを通り掛かった時、あなたのブタに気づかずにはられませんでした。なんと丈夫そうなブタでしょう。なんと素晴らしい！ご自分で育てたのですか？」

おばあさんは嬉しくなりました。

「そう言ってくれてありがとう」と、おばあさんは言いました。「ええ、そうです。私が子ブタの頃から育てました。そこにいる大きい方は ——」と、おばあさんはウィグワムのすぐ外で警戒してこちらを見ながら座っているゾーンガンを指差して言いました。「ゾーンガンです。その弟で、今、野原からこっちに来るのがオシュキです」

「なるほど、あなたはとてもうまく彼らの世話をなされたのですね。今まで見た中で一番素晴らしいブタたちです」。男は力強くうなづく仲間を見ました。「ブタたちは、もうすっかり大人ですよね」

「ええ、そうです」と、おばあさんは答えました。「でも、最初に見つけた時、彼らがどんなだったかを見せたかったです。とても痩せていて、小さかったのですよ！ でも、見事に太らせることができました。彼らはとても元気になったと言えます」

「ニシン —— 素晴らしい、素晴らしい」と、男は少し心ここにあらずという様子で言いました。男の視線はゾーンガンに注がれていました。

男はおばあさんの方を振り向いて言いました。「ノーコミス、私たちとタバコを一緒にいかがですか。今日はお祭りです。あなたにタバコを差し上げるのは光栄なことです」

おばあさんは喜んで受け取りました。その村では、タバコをささげるのは神聖なしきたりでした。加えて、この男たちはとても礼儀正しく見えました。おばあさんは客をウイグワムの中へと案内し、席を勧めました。

数分すると、男たちの一人が言いました。「ノーコミス、あのあなたのブタたちは本当に素晴らしい」

おばあさんは男を見返しました。なぜだか、男の顔がはっきり分かりません。目の前がかすんでいました。急に意識がぼんやりしてきました。この時点で彼女がその場の状況をもっと把握できていたなら、男たちがくれたタバコは何かおかしい、何か酔わせるようなものが入っていたのだ、そしてあの男たちは実は良い意図は持っていなかったのだと、気づいたかもしれません。

しかし彼女の思考は、そのような分析ができるほど正常に機能していませんでした。

「うーん」と言うのがやっとでした。

「あなたのブタたちです、ノーミス」

この時までには、おばあさんの目は閉じてしまい、一人ほほ笑んでいました。ついには話すかのように口を開くと歌い出す始末で、それも驚くほど音程がはずれていました。「大丈夫、大丈夫、すべては大丈夫…」と、ぼんやりと歌いました。

男はチャンスだと思いました。「お願いします、ノーミス、私たちにブタを1頭売っていませんか？」

おばあさんは、ただ歌い続けました。「大丈夫、大丈夫、本当に大丈夫…」

「小さい方のブタではどうでしょうか」と、男は尋ねました。男は、おばあさんが正気を取り戻すといけないので、それ以上は欲張りたくありませんでした。

「大丈夫、大丈夫、何もかもすべて大丈夫…」

「素晴らしい。それでは、行ってブタを捕まえてきてくれますか」と、男は頼みました。男は手を差し出しました。

いまだ幻想の中で、おばあさんは男の手を握り、よろよろと立ち上がりました。男はおばあさんをウイグワムの戸口に連れて行き、そこで彼女は歌いました。「オシュキ！ オシュキ！ こっちに来なさい！」

さて、しばらく前からブタたちは、ウイグワムのそばの草の中に隠れていました。彼らは、おばあさんの会話をすべて聞いていました。彼らの目は言葉が交わされるごとに大きく見開かれてい

きました。おばあさんがオシュキの名前を呼んだ時、彼は恐れた表情を浮かべて兄を見上げました。

「兄さん、変な人たちが来ています。彼らに連れ去られたくありません。何か危険が待っています」。オシュキの口が震え始めました。

ゾーンガンはとても優しく頭を弟の頭にこすり付けて言いました。

「本当にごめん、オシュキ。そうできたらいいのだけれども、私はおまえの運命を変えることはできない。しかし、これだけは言うことができる。おまえがどこへ行っても、おまえに何が起ころうとも、水たまりで水浴びすることを忘れないように。水たまりで水浴びすれば、ヒマラヤスギの油のようなかぐわしい、決して消えることのない香りを見つけるだろう」

ゾーンガンがこれを言った時、おばあさんはまだウグワムの戸口に立っていました。酔いはさめ始めていました。おばあさんがブタの言葉を聞いた時、それは彼女の心を突き刺しました。

彼女は目を涙で輝かせ、ウグワムの中にいる男たちに振り向きました。男たちは眉を寄せ、ポカンと口を開けて彼女を見返しました。男たちもゾーンガンの言葉を聞いたのです。ブタが謎掛けのような矛盾したことを話している！ どう考えたらいいのか？

「行ってください」と、おばあさんはしっかりした声で言いました。「私のブタたちは、あなたたちや他の誰にも、買えるものではありません」

男たちは逆らいませんでした。彼らは謝罪の言葉をつぶやき、そして、とにかくその日にすぐにする必要のあることがあるからと、何か他にもぶつぶつ言いました。彼らは驚いたまなざしでおばあさんとブタたちを最後にもう一度ちらりと見て、よろめきながら出て行きました。

ニュースはすぐに村に広まり、程なく村長は何が起こったのかを耳にしました。彼は興味を覚え、おばあさんと彼女のブタたちを、彼が家族と共に住むウィグワムに招きました。

彼は丁重に彼らを迎え入れ、見事なごちそうで彼らをもてなし、それから思っていたことを話しました。「ゾーンガン、私は最近あなたが偉大な知恵を話したと聞きました。しかし、あなたが言ったことはとても不可思議に思えます。『水たまりで水浴びし、決して消えない香りを見つけてなさい』。この意味は何ですか」

ゾーンガンは村長にほほ笑んで答えました。「水たまりは愛です。そして愛は決して消えることのない香りです。私は弟に、この世を去る時であっても悲しまないようにと言っていたのです。私たちはノーコムスとこんなにも良い生活を送りました。彼女は愛とは何かを示してくれました。たとえこの体が消え去っても、私たちが知るに至ったこの愛 —— 私たちを取り巻き、私たちの内側にあり、私たち自身の本質であり、すべてをつなげるこの愛 —— は破壊できないことを、私はオシュキに理解してほしかったのです」

村長は、しばらくの間黙り、それから感謝を込めて、一度、二度、三度、うなずきました。

「あなたは実に賢明です、ゾーンガン」と、彼は言いました。「あなたがしたような助言は、村の課題に極めて貴重なものだと思わざるを得ません。私の家族と小屋に加わることを考えていただけませんか。実際のところ、あなた方全員が加わるべきです —— もしあなたの弟とノーコムスもここに住んでくれるなら、私は非常に光栄に思います」

そして、そうになりました。2匹のブタと彼らを引き取った優しいおばあさんは、残りの日々を村長とその家族と共に過ごしました。彼らは安楽に、そして目的を持って生きました。彼らの親切さ

と知恵、謙虚さと実直さは、彼らと出会うすべての人にとっての手本となり、刺激となったのです。



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。

イーシャ・サーデサイによる再話

この物語は、ブッダ神のさまざまな化身についての寓話や逸話集であるジャータカ物語の一つに触発されたものです。